

【終了報告書】

研修先大学/ 活動先機関名	St.Hilda's College of Oxford	参加 プログラム	セントヒルダプログラム	国名	イギリス
氏名		学籍番号		学科	英語英文学科
参加時の 学年	2年	参加費用 (日本円で概)	約120万円		
参加日程	2026 年 8 月 16 日 ~ 2026 年 8 月 31 日 (2 週間)	記入年月日	2026 年 9 月 1 日		

① 参加前について

研修・活動に参加する目標は何でしたか。

セントヒルダプログラムで、CLIL方式を用いたテーマ授業に関心があり参加しました。高校でCLIL方式を用いた授業があり、世界で起きている自然環境の問題について英語でプレゼンテーションをした経験がありますが、その時はコロナ禍で海外渡航が難しかったことや環境問題をテーマにしていたこともあり、インターネットや書籍から情報を集めて調べ学習をしたため、実感を伴うことができず表面的な理解に留まりました。。セントヒルダでのテーマ授業では文化や歴史、社会学分野といったイギリスの多様な側面について学びながら、現物を見たリイギリスで生活している人々の価値観に触れるといった実体験を通して、カレッジでの学びをより深めたいと考えています。また、今回の研修を通して現在世界で起きている諸問題について日本だけでなく他国の視点を得るきっかけにしたいと考えていました。

② プログラムについて

研修・活動の感想

午前中はCIE Oxfordの先生から建築や文学、多文化共生といった多様なテーマの授業を受けました。建築の授業では、オックスフォード大学の所有する建物の歴史を学び、実際に外に出て実物を見ながら建築様式の違いや変化について学びました。授業は10人程度の少人数で受け、先生から質問を投げかけられて発言する機会が多く、双方向の授業であったため理解を深めることに繋がりました。午後は、オックスフォード大学の学生とプロジェクトワークに取り組みました。「人を幸せにするものは何か。」をテーマに掲げ、心理学を専攻している学生のサポートを受けながら調査や街頭インタビューを行い、プログラム最終日のプレゼンテーションに向けて準備を進めました。プレゼンの大まかな部分は自分たちで行い、参考文献を探すときや街頭インタビュー、調査結果の分析をするときにオックスフォード大学の学生のサポートを受けて説得力のあるプレゼンを行うにはどうしたらよいか考えました。写真を見て学ぶことは日本にいてもできるけれど、実物を見ながら授業の内容について考えたり、「不思議の国のアリス」といった世界的に有名な文学作品が生まれた場所で学んだりすることはオックスフォードに行かないとできない経験だったため、実感を伴った深い理解を得られたと思います。

研修・活動以外の部分についての感想

休日はロンドンで「レ・ミゼラブル」「ウィキッド」「オペラ座の怪人」の3作品のミュージカルを観ました。劇場の建物そのものが歴史的な価値のあるもので、空間も含めて総合芸術だと感じました。日本でミュージカルやパレオといった舞台芸術を見るときはフォーマルな服装で厳かな雰囲気があり、緊張感のある空間ですが、イギリスの観客は好きな作品を好きな服装で楽しみに来ている様子でした。また、日本のミュージカルは期間限定でコンサートホールを借りて、録音した音源を用いることが多いですが、イギリスは専用劇場になっていて大掛かりな演出と生のオーケストラの演奏で迫力がありました。

現地学生との交流について教えてください。 ※交流がなかった場合は、空欄で構いません。

午後の授業は、オックスフォード大学に所属しているコンパニオンの学生とプロジェクトワークを行いました。私は、「Happiness」をテーマとしたグループだったため、大学で心理学を専攻している学生とプロジェクトワークに取り組みました。街頭インタビューを行った際にはオックスフォード市内の大学関連施設について教えてもらったり、カレッジの図書館を案内してもらいました。学生の視点からオックスフォード大学についてお話を聞くことができたのはとても貴重な機会だったと思います。

③ 参加の成果について

今回の参加を経て、ご自身の中での学習面・精神面の成果があれば教えてください。

参加する前はスピーキングに苦手意識がありましたが、今回のプログラムでの授業でのやり取りやホストファミリーとの会話を通して、完璧な文章で話そうとする必要はなく、伝えたいことを自分の言葉で相手に伝えることが大事であると気がきました。また、これまで授業中に自分から手を挙げて発言することはめったになかったのですが、カレッジでの授業では発言をして授業に参加している姿勢を示すことが重視されていました。間違った答えを言ったり上手く英語で言えなかったとしても、発言したことに対して先生がリスペクトしてくださったので、発言することに対する抵抗感が少なくなったと思います。プロジェクトワークではメンバー同士で意見がぶつかることがあり、最後まで上手くやり遂げることができるか不安になった時もありましたが、コンパニオンの学生にサポートを求めたり、お互いが納得いくまで話し合いを重ねたりしたことで大きな問題が起きることなくプレゼンまで終えることが出来ました。以前と比べて、困ったときに自分の中でため込むのではなく、言葉を尽くしたりすぐに他者に助けを求めたりすることができるようになったと思います。

④ その他

その他、気づいたことや今後参加する方へのメッセージがあれば記入してください。

イギリスの人は「Thank you」と「Sorry」を些細な場面でも言っていました。例えば、バスから降りるときは運転手さんに感謝を伝え、道を譲ってほしいときは一言謝ってから通るなど、日本だと状況を見て察したり会釈だけで済ませたりするような場面でもイギリスでは言葉にしていたところが印象的でした。

授業で先生もおっしゃっていましたが、イギリスの人はあまり他人に関心がなく自分を優先にする人が多いです。しかし、知らない人同士でも助け合ったり仲良さげにお喋りしている姿を何度も目にしました。困ったことがあったら、誰かが察してくれると期待せず話しかけて自ら助けを求めることが必要です。たいていの人は優しく、力になってくれるので大丈夫です。

国際センターのHPに掲載してもよい写真があれば添付してください。キャプションもつけてく



最終日のCertificationにて



授業で使った教室